



五 泣きのバージョン

「泣きなさい、泣きなさい。いつの日か、いつの日か、花は枯れちゃうよー……」

なんだ、なんだ、どこかで聞いた曲が慣れてきたぞ。だけど、元歌は心に沁みる歌のはずだ。なんだ、花は枯れちゃうよ、の歌詞は。そんなの当たり前だろ。思わず、突っ込みを入れる。まだ、さっきのお笑いバージョンの残像が続いているのか。

「あたしゃね、この年まで生きてきたけれど、そりゃあ、楽しいことも、辛いことも、哀しいこともあったよ。最大の哀しみといえば、良人との別れかねえ。五十年よ、五十年。半世紀も、ひとりの人と一緒に生活を伴にしてきたんだから。それがあつという間にいなくなっちゃうだよ。なんだかあたしの五十年が消えて、なくなってしまったような気がしちゃうよ。人生って、儂いね。

そう、あの人は、確かに靴をはかずに、裸足でうろうろするのが好きだったね。裸足のアベベになるんだ、が口癖だった。あたしゃ、それはすごいねと褒めながら、背中を見せると、なれるもんかとアツカンベーと舌を出したもんだ。それは二枚舌の行為だって？さっき言った良人との別れが哀しいという気持ちは嘘なのか？だって。

あのねえ、あんたは人生を知らなさすぎるよ。そりゃあ、確かにあの人がいなくなってさびしい気持ちがするのは本当のことだよ。けどねえ。一緒にいた時がずっと楽しかったってのは嘘だよ。あたしも人間、あの人も人間、あなたも人間。お互いに気にいるところも気にいらないうところもあるよ。全てを受け入れることは無理だよ。それこそ肉体的にも精神的にも奴隷にでもならないとそうはならないよ。だからこそお互いに言いたいことを言い合ったり、とりあえず相手の言うことを受け入れた振りをするのも、長く一緒に生活するためには必要なことなんだよ。

えっ、アベベを知らないの。そう言うことなの。オリンピックのマラソンの金メダリストだよ。知らないの？キューちゃんなら知っている？誰それ？おぼけのQ太郎かい？えっつ。おぼけのQ太郎も知らないの。世代の差を感じるねえ。でも、それもいいかも。人間、何から何まで知らなくてもいいんだよ。いや、かえって知らないほうがいいんだよ。あの人が死んだ時、日記を読んだんだよ。遺品を整理していたら、何十年にも渡る日記だったんだ。あの人が書斎、いやこたつの上で何かを書いていたのは知っていたけれど、まさか日記とはね。でも、亡くなる数年の間は書いていないんだ。ポケだね。認知症って言うのかい。その病気のせいで、毎日日記を付けることを忘れてしまったんだろうね。

その日記を本当はそのまま捨てしちまったらよかったんだけど、あたしもまだ好奇心が忘れられなくて、つい目を通したんだよ。直近の内容は、どこそこのうどん屋に行ったとか、京都の紅葉

を見に行ったとか、たわいもない話だったんだけど、あの人が四十代の頃、あたしが三十代で子育てで忙しかった頃、あの人が私以外の人と一緒に食事をしたり、旅行をしたりしていたことが書いてあったんだよ。浮気？本気？思い起こせば、あの頃、あの人が仕事で出張だとか、仕事で遅く帰って来た時が多かったような気がするよ。それでも、こっちも子どもに食事を作ったり、お風呂に入れたり、寝かしつけたりとか忙しかったから、そんなことにもあまり気にならなかったよ。それよりもあの人が早く家に帰ってきたら、子どもが一人増えたようになるから、返って早くに家に帰らない方が楽だったんだよ。

そんなあたしの心を感じてか、あの人はわたしの体と心から離れてしまったんだろうね。それもしょうがいなよ。怒らないのかって？そりゃあ、仏壇の位牌を投げ飛ばしたり、お墓を横倒ししたりしたい気持ちもあるけれど、そんなことしてもなんにもならないだろう？過去は起こったこと。今さら過去を変えることはできないんだよ。変えることができるのは今から、未来だけなんだよ。それに、あの人もわたしのとろに帰ってきてくれたんだからね。今はこの仏壇の中。もうどこへも行けやしないよ。これじゃあ、散歩することもできないよね。ごめんね。あたしばかりしゃべって。ところで、あんた、好きな人でもいるの」画面の中からは八十歳頃のおばさんがこちらに顔を向けた。おっと、ひとり言から、俺に話を振ってきたぞ。

「いやー、いるような、いないような。いないような、いるような・・・」急な展開にしどろもどろで同じ答えを繰り返すことしかできない俺。

「何、照れてんだよ、あんた。このおばあさん相手に。もし、あたしが、後十年若かったら、あんたと付き合っただけでもいいよ。もう誰と付き合っても、不倫とは言われないんだから。あっはっはっはっ。あんたも見たとろ、まだ若いんだから、パソコンの前ばかりに座っていないで、街に出て、人に会い、本当に好きな人みつけなさいよ。生きて、生きて生き抜かなくちゃあ。いっひっひっひっひっ」

おばあさんの話す内容と笑い声にギャップを感じながらも、俺は「はい、わかりました」と素直に返事をする。なんだか、ちょっと、心に沁みた。心が潤った。思わず椅子から立ち上がり、おばあちゃんの前に正座し、熱いお茶を啜り、せんべいを食べたくなる気分だ。もちろん、せんべいはお茶に浸けて、少し柔らかくして食べるのだが。

「そりゃあ、よかった。あたしも、もう年だから、あんまり長い時間しゃべられないんだよ。それに、入れ歯だから、言いたいことが口の中に籠ってしまい、半分も外に出せないんだよ。だけど、それぐらいが一番いいのかもしれないね。

長い間、生きてきたけれど、思ったことを全て口に出してしまうと、とんでもないことになるよ。カメレオンの舌のように、しゃべった言葉を直ぐに引っ込めたり、相手がまずい顔をしたら七

色の言い訳ができればいいんだけどね。それも人生経験かね。とにかく、体にだけは気をつけなさいよ。まだ、親御さんだって、健在なんでしょう？くれぐれも、両親よりも先立つような、親不幸はしないように。元気が一番。

野菜食べている？三十歳を過ぎたんだから、肉食中心から野菜中心の食生活に変えていかなくっちゃね。運動はしているの？散歩ぐらいしなさいよ。それができないのなら、家の中でも、掃除や洗濯、ゴミ捨てなど、家事を率先して見つけて、無理やり動き回るのよ。今の一步が、今日の千歩、明日の一万歩になるのよ。

あたしゃあ、残念だけど、もう歩くこともできなくなっちゃったけれど、正座なら一日中できるよ。でも、そのまま体が固まっちゃって、人から生きているミイラなんて言われることがあるよ。マスコミまでが、「生きたミイラのおばあさんのインタビューをしたいんです」と取材に来るんだよ。何が、生きたミイラだよ。ひどい話だね。自分の体を思い通りに動かすことができなくなってしまったけれど、まだ体は必要で、「身いら」ずではないからね。あたしにだって未来はあるよ。うっふっふっふっふっ

田舎の祖母を思い出した。いつも、座ぶとんの上に正座し、縁側で日向ぼっこしていたおばあちゃん。その隣で、話友だちなのに話すことがもうなくなったかのように、猫が丸くなって居眠りをしている。縁側の下では、犬がはあはあと舌を出し入れしながら、お腹を地面に擦りつけて、日影で涼を取っている。元気かなあ、おばあちゃん。それに猫のたまと犬のポチ。みやあとはあはあはあ。

「それじゃあ、さようなら。もう、会えないかもしれないけれどね」おばあちゃんの姿が画面から見えなくなっていく。影が薄いとはこういうことか。

「待ってよ、おばあちゃん」俺はおばあちゃんの姿を目に焼き付けようと画面に顔を擦り寄せる。だけど、やはり、おばあちゃんの姿は薄い。俺の目が悪いせいじゃない。

「悪いけれど、あたしゃ、あんたのおばあちゃんじゃないよ。でも、待ってと言われたら、うれしいね。今じゃ、誰も待ってくれないからね。待っているのは、あの世のあの人だけだよ。えっへっへっへっへっ」おばあちゃんの姿はもう見えない。声までが掠れて、聞こえなくなっている。それでも俺は画面に向かって声を掛ける。

「俺のばあちゃんじゃないけれど、人類みんなのおばあちゃんですよ。それに、もう、会えないだなんて哀しいことは言わないでくださいよ。もう一度会いたいのので「さようならは言いません。また会いましょう。必ず会いましょう。絶対会いましょう。どうもありがとうございました」俺は隅を掴んで画面を揺すぶる。

「だめだよ。そんなに強くしちゃあ。あたしはお年寄りなんだから、もう少しやさしくしておくれよ。それでも、そんなにまで言ってくれて、どうもありがとうね。あんたみたいな人に会えるのだったら、長生きもしてみるもんだね」と言葉が終わらないうちに、おばあちゃんの姿と声は完全に消えた。

頭の中が空白となり、体の器官が全て止まったかのようになった俺。だが、しばらくするとふと我に返る。俺、画面に向かって、何礼を言っているんだ。ついでに、頭も下げちゃったよ。でも、つい、でちゃったな。俺、年寄りに弱いのかな。本当に、田舎のおばあちゃんを思い出したよ。それとも、最初の年齢の設定が三十歳っていうのがまずかったのかなあ。あれっ、アラームが鳴っているぞ。残念だけれど、今日は、おしまい、おしまい。終了の表示をクリックした。